薩隅日兼領琉球國旧記

藏書目

七十九老

老人養

曽
269
3

和装本
ヤ10
269
3

門ヤ曽10
弱269
巻9

老人必用養草巻五

牛山翁　香月啓益南　纂

○老人疾病治療乃説

人年老くい氣血弱くなり皮膚薄くなりて風寒暑湿乃邪氣に感じやすくなり受る所の邪氣も多く弱くなりて人に大なる事はなはだ少くなりて枝葉乃ごとく吹折る事あれども決して枝葉乃風も弱くなりて枝葉乃ごとくいたりて吹折る

るかたにてくしかくすとくあるうるを邪気
つきはのはやくとるされるよりもくるしむ事
是し老人胃府の感冒乃症ハ参蘇飲香薷
散の類して発散し汗して金ふかうるハ
発散乃薬を服とる事をすみやく汗を
殺さるるのたるべし
老人合り傷寒府ハ消導乃剤を用ゆ藿香正
気散不換金正気散の類こゝに貼用ゆる香
砂六君子湯香砂平胃散乃類を用ゆ合
薬をすみやく服とゆるに

元気を損して害すかし
老人ハ寒邪をとるされやすし冬月寒氷傷
きハ理中湯を服とゆ老人ハ血うすくおよりて
寒気血分を凝とゆ五積散を用ゆによろし
内外血分より入て経絡をめぐる薬すかるれて
其効ときやうたるべし
老人ハ気よりきたるより炎熱よ堪ゆく異邪よ
とるされやすし夏月汗を殺とる府ハ元気も
ゆわく害すかし六君子湯ハ益清防風砂仁
乾姜を加へく用てよろし六君子湯ハ人参

人羊乳根を用ひ羊乳根は和俗いふ所の浜
つゞら人参といふものなり藥店にては強人参
といふその味甚くして脾胃を補ひ肺氣を益
さく人参に次くものなりともも氣藥
きものにて元氣を引き起す乃効なりそれゆへ
獨参湯なくの用ゆ何ほどに補ひても益
なしなりのうち平生老人乃服用もろ六君子湯
補中益氣湯なくの類ゆ人参に次用てその
益ゆゝ氣弱き病ひ朝鮮人参を用ひ朝鮮
人参を用ふるも羊乳根とをなじく白朮乃

脾胃を補ふ甚功ありぬるのなり
老人ゆ風藥合澤乃藥を用ふるその邪をもとゝ
ナ分に邪を逐去へるに七八分ほど用ふるの跡
ゆ六君子湯ゆ羌活桔梗を加へ或ひ咳嗽あ
らば藥白皮山梔子を加へ盜汗あゝ黄芪を加
へ用ひ合澤の藥を用て消導もろ跡ゆ
六君子湯ゆ砂仁乾姜末香を加へて用ひ
老人ゆ氣ゆ乏しきゆよりて常に藥を服ぜざれい
ども日々毎日朽米汁服もろ
その多ひ脾補の剤を用ひるに異功散

當歸砂仁を加へて用ふべしたゞ痰あれば
貝母を加へ食をゝ菖蒲を加へて其
効あり老人ハ脾胃乃まよくめぐれば病な
し腎を補うんよりハ脾を補うんよいもの
と孫真人も說たり
人初老のはゝ陰氣をのぞくべすくあき
ハ陰を補ふよりと用べきなり六味地黄丸
八味地黄丸を用ゆ其益多し初むより中
年まゝ用ゆ六十ゝ用ゆるもまた人四
十より五十有餘まゝハ陰氣ゆゝとゝ

いまゝ盡よつゝゝ同氣相求むるの理ゝ
も補陰乃劑とりて調和乃法氣とよび
久しよりそ其益あり六十有餘よりハ陰血
ゝゝ久調ゝ補陽乃劑をゝくべきのあい
てゝ年ゝ人で草本の物ゝとりハ入ハ也
けゝゝ水ゝ培ひたゞとれいろの
草木りのでゝ培ひたゞ已ゝ草本物ゝ
物ゝゝ生氣ゝ
いゝゝやく腐植どろみあるゝ人血分調
て脾血かゝゝ法膚鎖ゝて一元乃真氣乃

たとへバ人ハ槁たる木のごとし久しくて枯槁となれ
土中に根ありてさへ日しげしとてもかぎりあれバ
終にハ倒る事なり人の天年を尽して死する
ものなれバ此本の人に六味八味の地黄丸を用ひ
たりとて陰気の増べきやうなく反つて槁
木に水をそゝぐごとく腐損さするのミなるべき
なれバ損ありて益なし
或人の許にある薬種修合をして家僕を
あつめ薬研石臼などならべて左右の主か
て物させることよりハ事にいたる薬を修合

しけるに中にも一人ありて拝備丸を製しけれバ答
けるハ予がいふごとくの如き薬餌ハいまだ聞訓
ねバ事なかりしかどもありて聞訓にぬ
ことありてこそものゝ換絡なりと仲景
の八味丸なり世間の人常にハ此薬を服して
腎精を滋し補ひより中年まで湯薬を怠
ることなくしも主君よりも金銀を拝借して己
ぶりみたりしてかへるものし拝借せざれバ
貧しきものゝ家にハ乏しく拝借して生
いく居の屁くやうすれバミづから金銀をはかる

銭借の金銀をなほ尽くしてのち貪りき富の
財を添へつゝひい身をうゝ新しい富を滅とう
くいろいろにわすやといへれろいへ知りき
事ちう手毎びせ人を作ていへ貪れ
人銭借してもかの不如意とあとほハせ乃
常ちう世人金銀をようさがみ用ふとれた
其益いとなるこれは金銀して去づゝく富たく
をそのひゆへうへ人行く害成とう世間貪慾
乃人をろろみるもお貪ろう銭でも金銀ハい
くゝ有くもわるめ事ひく用てもあぬ

うり人の金銀を借く富人たるべきはもをこと
てはうりと守銭乃奴とあろ者い此人金銀を富
ふよりて身を害とりにて新金銀ハつひて
世間をうるふ所をいくまを賞とすはなり人乃
元氣もはろハこふ何乃益あんこ天とう
うまくはす才能を生付の人ハ文学の才あう人
とう人の師とありて学問を世ろ人おしへあ
藝能乃わろ人もそれを世間の益とをとう
おろんハ何のいまふ甲斐あんやうく元氣を
惜をといて害あう人ハ其識ふとも勤ど

而もつさ人多浪拓して病者みて元氣とかしき
とて肉食を嗜み補腎乃劑とさへいへりあ
出く服し精氣を保とあとつくあやき鳥
獸よりもて強壮なく今人者いと何乃用にも
なれ金石を備毒乃毒してこれをやよく心
るを甘ひまけく食しきは物備して病ひ
をよく去れて壽云とはとあめへといひくなる
ひう名ひこなりぬ
人の常ゆ服してよろしき藥剤い六味八味乃
地黄丸神仙巨勝乃円右帰丸左帰丸左比

ゑ藥圓　倭僧八乃字丸とゑ心茶伝長之市信の
名の八の字丸とゑ心はまろ心ひさこ心とろと中年乃比
服する何ハ腎精をもて下部の精をまはんとなるる八
のまれくこらのくあるとゑ乃麝いつまも其験
とらくゑ方ハ醫林集要ゑ出るなり
ゆかしはたゑゆるゆる藥いろの人ハ性小より
てゑるものとかるハざほとあとへ上ゑ腎師ゑ
おそれて用ゑるへきなり
老人ハ血氣潤くゑるひなれよりゆくい大役
秘結乃症多し和むゑ中年の後もへ法
氣ゆ中て腎精とゑるかと劑ゑ六味八味乃地
黄丸巨勝湯ゑ桃仁紅花など加へく服ゑ何

八月氣うるおひく秘結とる事多し七十八十に
到りて大便秘結とる人を治とるよい補法
の剤よりつかひて脾胃弱うるおを剤を
用ふるに秘結とる事多し補中益氣湯
に麻仁桃仁酒当薬を加へ服とすべしその
後神効丹溪の母は秘結を患ひ久
しく紅花の彩ちる牛乳或い精脂を糜粥
の中に入れて進めまとるふ志ばく通利せ
しむ其味乃臓物をひて用ふるにしたがひ
年の夏は弊帰して粘痰を生じ昭服よ
ろを教へて苦痛せしむるこれおのく丹溪は
悔して一方を製して用ひる人参白朮をもて
君薬として牛膝当薬を臣として陳皮茯苓を
佐として春い川芎を加へ夏い五味子黄芩麦
門冬を加へ秋冬い當帰を加へ生姜を倍し
一日に一貼あるいい二貼を用ひる大便通利せ
しむ格致餘論より載せる海世全書よい処方
を載て陳皮と書て其外を加へるもの
は○よ多へ乃秘結を治とるふ法方よ別に大
棗黄芪を加へくこれを用ひる其験を得ら

中年より耳聾のはなはだしきの秘結よい此方り熟
地黄をかけくわ加へく甚効神のごとし千金
方り老人の秘結を治するよ人参湯といふ
あり人参麦門冬乾姜當帰白茯苓甘
草五味子黄芪芍薬桂実肉桂半夏大棗
の十三味なり丹溪も此方よりつくり製す
まうとおもふ此薬を用ゆる効ありて後
老人の秘結を治するふまた比杏苑の半夏を
あぶりつくさ洛日ろうそくをぶしにして蜂蜜よ
ひあしして煮へ玉又は砂糖漬よりもく秘結の治

菓子よ用ゆるよりく大役を通じるかり秘結の
ろなり
老人の弱くの津液うるおいなくして疾喉を患ふ
ものなり性つよいもよい薬流丸宝湯或ハ
三子養親湯なりを用ゆる甚効あり
ともも老人の元氣弱々れい疾を驅の利を以
々見つるとき結構のい所先あり只貶
用ゆるやしうの孫い六君子湯を用ゆるみ半
夏を貝母よりくて麦門冬五味子青皮山梔
子桔梗を加へく用ゆるなり

老人の疾多くして腸鳴ふさがるもやとして夜外はよ
延胡丹を豆粒ばかり合て寝ぬし疾ふさ
ぐ次第死ぬるもあるなり
老人の疾切なる延胡丹
世方の　李邦乃醫はくすり薬方ふんの中
華の書ていまぐさんあて次五方組のる其
家にしてかつての四ぐらあるなり平ら家
持つる所の方常に用く験あれたると
沉香肉桂丁子形仁辰砂甘草各立木香
白檀香乳香桔梗蓽撥各三麝香三文龍腦

八分　右極細末して煉蜜にて俊合して杵る千
除杵して用ふたり位の氣はを疾切に用其
効驗合香円よりゆづて疾ふさぐほとれい生
姜の湯にて用ふるべしなり
老人の腎精よりて下部の冷ゆて
小便頻りもけして小夜卧くなるなるく小
便と云ものは湯に益智當歸蓽薢と加へ
て用ふるつの湯にて茶ひとくふかぐ
よれるり東坡の從て江南よりひとの老人を
年七十ものうちも氣力も弱ものの人乃

こゝにこれを其術とす常の人よりもこゝぬ
るゝ事ゝ平生うゐて湯水とのまざるけを
常の人いひして穀升をのむこれいひて穀合
を減して腐を治とゝ脾胃へ湯を悪ず
飲多けきい小便穀みて元氣を脱を飲ず
くれい胃強く氣盛り渋行て自然ゝ湯く
と欲い暑をあゝて寒くいつもあとお
もうといろひるゝ養老新書ゝ載ゝ
老人ゝくゝ小便ちげさに外と附糟をゆゝて
吟ひろのゝ酒をゝく向して行ゝ外とたい

小便ゝ親ゝまゝ古老の伝ゝこれを
こゝろみゝそぐゝと小便をちぐ先ゝ老人ゝ
盃ゝいつゝ年月ゝ付ゝ糟を吟ゝと
きい疾を生ゝ脾胃ゝ癌出ゝ他病ゝ変
どそぐ湯茶をひゝて小便をちぐひろゝい
ゝず
神老の附ゝ中年のゝまゝて人ゝよりて房慾と
酒ゝて泄さゝのゝあゝきゝつゝ虚弱ゝて慾
情のすゝ少ゝ人いゝ元に固ゝれゝ保ゝ養の術ゝべ
ゝこれ以ゝ其人の情慾いゝきゝちゝりのゝて

酒食あるべからざる物を制するなり
もれい精情うさちんして接さんとも精氣晴
ふるれて下部より流るゝて或い侵毒和俗よこれ
下痳瘡とちる新まき多く或い遺精白濁乃
病とちる金氣より房慾のるすえとれ如
湯まも新らかるの人い一月より一度い洩
るるもよれたちる房中補益ちいるるまも
け慾情乃火をお女の陰ゆとして消とるの元
たちるへ房慾と禁して遺精とるさるのい多
くい心腎虚ゆるるさるる故たり清心蓮子飲加味

歸脾湯を用てよろし或い遺遺散を加減し或
ハ四君子湯と針麻蔓根湯を合して柴胡
山梔子防風酸棗仁石菖蒲を加て用へし六
味八味乃地黄丸を服せしむる醫あるこれるの
病根を除こさすそ腎氣乃虚とのこれるこ
ろ新久へ神むこほ乃遺精いこみ慾情と禁さ
へて心脾の氣虚病して茅澤し下焦に下漏
もるよりてたちるあるよて一百の薬を用へし百
発百中乃効あると世醫のもてこるるにてそうが
家秘なりといへども世乃みるよまへにたるす京師

乃御点といふあり一生不嬉乃尾あり五十肯
除なり平生之病みて歩行も健なれども面
色乃青白なる草の業けづくりて血色
これなくみな精気とうこいて血色なれ
気弱くてわづらされべたりは尾も世代のれ
て色慈なとい物のうずくもせぬ気性乃人な
きづくもなり古人乃説よ嫌まづいて移退
さ人接て色蘖といふ所のなるべしなは
いつも人すまるる過くく接るこれい色澤去
るをもつて

乃人大積大痕と病るあるといへども治なく積
痕をなしる薬代服とうこれ病甚きこれい
大七気湯と五六貼も用てはよ未効六君子
湯或い六君子湯よ加減なる類と用て脾
胃と書ふるこれの常なる乃人といた
大なる積痕あるて後病甚きこれいきなれ
麿積乃剤と用ひ又邪なとなく受こ
これい痕散の剤と大料みて用ても邪気
ご薬と相ずこうして元気を害せ放あれば
損ずといふ所のてなるなり世醫い変ず

達とるるすなわち老人といへども弱のもとなる
て邪氣とうばるるけをい邪のあつまる所
氣うれうと虚してそのをいつてうに絶く効得
へきまなり

老人病あるときあるく鍼灸をうつに鍼せい老
練乃妙を以探ぶしてゆさめて森工い損あり
て益なく病をうつにいやむ人
よりて病減とる人あり老人いとうをも
鍼灸按摩をふ常に仕るべしてをたなり
てやうをたりのなり絶く平効得るなり

老人に邪かくに灸をとるふとうのに元氣をか
しけまびなりうあ病あるとやむるをえば
て灸をとる先邪わかく穀をうとうに皇朝数
苑といふ書に艾一炷を一壯といふ壯人壯
とい三年黍を壯といをいく法をも老幼いろのか
ろいろ乃人をつ
をけりてその穀を減ぶとろに絶くも
老人よりて灸法をたりてをたとつ人あ
きにこれうの人に各別乃事なりその人乃
をよ法うまへきなり
老人乃病い邪氣あるといふとも十分に退きんと

物よりこれに十の物七八分をもつてこれを二分
に強とへてこれの邪をのぞくこれをもつて保養乃
拘藥なりとも物わかく服とへこれに主人乃氣血
うすきうへにあへて乃常るれいにうたがふ補
法乃剤を沢山に服しこれをもつてほとんど
しこの事比わかるみ物合る元氣のいうる
らと服業服人らしのしへうす導生八歳
より人乃寿命ハ草木鳥獸のごとく延ふ所あ
あるまいつねはこれをもつて孝のるもちり
老人い血色ハ虚とるみよりて皮膚を栄養する

事あるいと肌痒の病を生ずる者多し肌痒
甚さ河い紙表寒ものちくもものさわぐか
きて皮膚よ麻目のごとくなる物出来ていつも
血とくわさあるよ痩ものちるふいこれ血も出と
湯のもちなるまさとうの遺遺散ゑ山梔子毛治
防風川芎荊芥連翹と加へて用ふこれい具
験あり又四物湯ゑ敗毒散を合し連翹防風
荊芥を加へて用もよし
人初むの比しの病あるい中風ゑ変ものさきと
付く保養ゑ人しの中風いみよりの本原風病より

あるいは卒氣をのぞき痰ちり初むるは比よりも
中年の間欠合好色の二慾を恣にして官あるは
人にその職分とはまたはまた業ある者いまだくその
家事とはまたしるかたより外氣を労動し腎水
漏泄し外邪をうけ陰虚陽実にして鬱風を
生じて中風にちかるべし世俗いう血虚に屬
するものは接さしめそもあらんかれば是麻痺し
言語をなすにあたらざるなり
あるいは八物湯か二陳湯を合して烏藥石菖蒲
を加へ又は十全大補湯に本方薏苡仁附子乾姜
乃歟を加へ用ひ初めくは卒中風よりもうすき
卒中風にて初むるは中年以後にその將衰怪雲
のごとくにして人或は寒暑の大邪にあたりまた
或は飲食に傷られまた或は疾病腫脹にふれうるまた或は
中年の後志を強くし或は躁きうけそそのの
まく半身うごかずして吐逆をなして卒倒するあり
猶參湯附子理中湯乃歟に加減して用ひ
一七日あるいは日数を經ずみもりて夢のさめる
ごとく鼾睡中に疾喘粥を飲食すれば出る氣
治まるべし一七日のうちに夢さめどもて直に死

ちゝふるほうさひわう心病いろゝの原よりあり
わうさるなり又は病一七日計を経て難りそのち
潮くれん乳後〳〵ふるもひ出く或い一ケ
月あるいは五月あるいはのちゝ全快する者あり〳〵
心病い或い脚病ゝ或い合陰ゝ中風をうか
ゝゝ発する〳〵又は病よ五月を経ても病
づゝそ十日けるかの快ゝたくゝふるもお
けるゝひ出言語もかつてけるゝ空ゆきゝ毎
ちるくゝも時さ方よけるぶ月を経て
もさのゝかゝるゝ事もゝ新あつかくのゝた

八年月を経ても全快するなくそくいのち
乃ゝゝゝほまでのゝなり又は病ゝ半身う
かいさるゝり見もその源よんゝくゝ孫い年
月を経てもうみいねゝのなりゝゝいま老
樹ありて半分乃枝いゝらそすれゝ生氣か
よいゝゝも半分の枝い葉ゝ花さくゝゝ
ひまの樹よいりかゝ培ひ常ひさしぶそ孝
分の枯枝ゝる方ゝ生氣かゝゝ事ゝ
ひゝを醫もよくゝかゝそのゝもよくさゝう
てまゝ分のゝみいねゝりとものゝ活さんとかゝ

ぞうに老人の病おもく成中に中風わるく
ふさいたり體のうるおぬさへあるよりも悔
悔しかりてさるべき嬰兒のごとく苦しみ
おもへとなるいの所世話いつくるべし人参
乃はしより此病あんるをおそれて飲食ぬ過
の二慾をはしむるこれ世病をまぬがるべき
なるに天年ながき長壽をそもらえて法血を
のうるるに真元乃一氣のこゝ有をかくのこ
とくるれいまく何の病もなく若しむるをく
て終をとるるなり小形の小町が寿に

面うるをの形をて年ゆはゆ秋うをうへ
いのちいうをうあるをのくるみるるをで病
なくて終をとるるたるの形るるべ赤人乃
牡丹乃
新つくはるるうる往生をけ行くいそぎ及
まへをおそかるあるぬるをよみるるおるをさう
なるる後るるへ
老人い上實下虚とる赤よ眼あるくるよ目眩
を生し臉のよそ下赤く燥るるメ東垣
乃助湯和血湯を用く動あり赤い遺寵散

よく梔子蔓荊子防風白蒺藜を加へて用へし
老人の耳目の病多くは気血不足の為血涸く孤湯あ
るいは下虚上実なる故なりつゝ逍遥散よ
六君子湯を合して用へし肝氣を抑へ脾氣を
たすけよりて耳目の病なりべきなり
老人の氣血もて弱く経絡を栄養する事の
さらと麻痺の證と患ふる者ゆへ此病ハ
この病ありてなほ老人脾胃の氣弱くして脾の
胃ハ混熱とくるゆへ熱よりて痰を生し
経絡よりて麻痺をなすのあり六君子湯よ

當歸奥母木瓜蓋茯仁を加へて用へし其
効神のごとし老人の氣血共に不足し経絡
ゆるまずして麻痺となるあり八物湯十全大
補湯よ木瓜蓋茯仁附子乾姜を加へて用ひ
べしこれよりの老人よりて湯氣くわく或ハ
人なくしての職事に勞氣と勞して氣虛して麻
痺となる者あり補中益氣湯よ酸棗仁石菖蒲
木瓜蓋茯仁を加へて用へし此病ゆへ冬月よ
発する者なり寒氣ハ血脉を凝滯せしむる
もの経絡の血めぐりなくして麻痺となるなり

乃藥にも附子烏頭乾姜を加へべきなり八味
收氣散亦よろし　老人の病多くは虚と
まの世寒にわげらるゝ所あらさは病みて
醫をたゝぬ者乃ち必得よりなりこれとも
を調合して服たゝくも害乃ゝ少なれ
これたゝとゝその藥方奏效にたゝ法き
ゆりぬ再い考合く用へきなり

附録藥方

參蘇飲の方　前胡　葛根各一　紫蘇　羌活
陳皮　枳殼　茯苓　桔梗各五分　木香三分

甘草二分　右調合して一貼の重さ三五五分
或いは五三分なと定めて生姜少分加く常
乃ちく煎じて用ゆ世方よい中華にて人
參を多く入く用ゆるなれゆへ參蘇飲
とゝ名付るなり支れも　本邦近世人參
の價安きゆへ世方くい用ゆるなり　脇毒
散も人參入るゝ支れも近来　本邦の醫人
ふるなし　世醫世方くい虚弱なる人に用ゆ
よい人參を入ゝ亦いかゝ人にく毒きなと云ゝの
あゝこれその道理とゝざはゝ參蘇飲

敗毒散は人参といふく事薛氏乃從は古人風
藥入れ者とめぐらし藥方の中に人参を用ゆ
るハ經絡を通して表分に走らしむるなり
とあるて此くれハ虛を補ふるハ用さるを
をもつて

香蘇散乃方　香附子　紫蘇　陳皮各一　甘草
三分　右細合して生姜弐分を加く水煎して
用ゆ表熱の重きよりハ此のごとく好皆これなり
かくのごとし

藿香正氣散の方　藿香一ヶ　陳皮　白朮　厚朴
大腹皮　半夏　茯苓　桔梗各二　紫蘇　白芷
甘草各五分　右細合して生姜二分棗一ツ接を
去て入れ水煎して用ゆ

不換金正氣散乃方　蒼朮　厚朴各五分　陳皮
藿香　半夏各三分　甘草二分　生姜を加へく
水煎ス

香砂六君子湯の方　人参　白朮　茯苓　陳皮
半夏　香附子　砂仁　厚朴　白豆蔻　木香
益智各少分　甘草少　右生姜大棗弐ツ入く
煎ス

香附子平胃散の方　蒼朮　香附子　陳皮　砂仁
枳實　藿香　木香　各多分　甘草少　右姜棗
を入て水煎す

五積散の方　乾姜　肉桂　各五分　麻黄八分
甘草三分　蒼朮三分　桔梗一分六分　陳皮　厚朴
各一分　枳殼　當歸　川芎　芍藥　白芷　半夏
白茯苓　各四分　右姜棗を加へて水煎す

六君子湯の方　人參　白朮　茯苓　陳皮　半夏
各ホ分　甘草少許　生姜大棗を加へて水煎す

補中益氣湯の方　黄耆　あづきの如くにして煎する
ありもしにてもんて用ゐ

人參　白朮　各三分　當歸　芎藭　陳皮　七分
外麻　五分　麻の外麻　柴胡　五分　鶴倉柴胡を用ゐる　甘草　三分　右姜
棗を入て水煎す

異功散の方　人參　白朮　茯苓　陳皮　各多分
甘草少　右姜棗を加へて水煎す

六味地黄丸の方　地黄八兩　山茱萸　山藥　各四兩
澤瀉　牡丹皮　茯苓　各三兩　右極細末して蜜
にて丸す

八味地黄丸の方　右の六味丸に肉桂附子各一兩
を加へたるなり八味地黄丸は仲景の方にそれを

錢仲陽こゝ名醫陳子肉桂と共に六味丸と
號せしなり無して藥方と加減とるに古人も多
くは加減減ずるなりそれをくらふる事をくて
減ずるのみ多発明錢仲陽の見識衆醫はお
よぶべからざる

神仙巨勝子圓の方　巨勝子　牛膝　巴戟
山藥　天門冬　熟地黄　酸棗仁　肉蓯蓉　覆盆子
各等分　右極細末にして煉蜜にて丸し或い煉蜜
にても用ゆるなり

左歸丸の方　六味丸に澤瀉茯苓牡丹皮を去て
枸杞子菟絲子龜膠を加へる方なり

右歸丸の方　八味丸に澤瀉茯苓牡丹皮を去て
枸杞子當歸　杜仲　鹿角膠　菟絲子を加へる方な
り

左比山藥圓の方　赤石脂　茯神　巴戟　熟地黄
山茱萸　牛膝　澤瀉　五味子　各五匁　山藥　十匁
杜仲　菟絲子　十五匁　肉蓯蓉　二十目　右極細末に
て煉蜜にて丸ず

四物湯の方　熟地黄　白芍藥　川芎　當歸
各等分　水煎一服す

蘇沉九宝湯の方　紫蘇　陳皮　薄荷　麻黄　杏仁

桑白皮 大腹皮 官桂 甘草 各ホ 生姜を入て水煎す

三子養親湯の方 半夏 赤茯苓 陳皮 黄芩 蘭香

根實 白芥子 蘇子 蘿蔔子 各等分

甘草少 生姜を加へて水煎す

道遥散の方 當帰 酒柴胡 酒芍藥

白朮 白茯苓 各等分 薄荷 甘草 各少許

煨姜を加へて水煎す

清心蓮子飲の方 蓮肉 人参 各二分半 黄芪

赤茯苓 各二分 麦門冬 黄芩 地骨皮 車前子

各一分半 甘草 一分 右生姜燈心を加へて煎ず

四君子湯の方 人参 白朮 白茯苓 甘草

各等分 右生姜大棗紙加へて水煎す

升麻葛根湯の方 葛根 升麻 芍藥

各一 甘草 三分 生姜を加へて水煎す

二陳湯の方 半夏 陳皮 茯苓 各等分

甘草 減半 右生姜を加へて水煎す

大七氣湯の方 半夏 厚朴 厚桂 甘草 各二

藿香 桔梗 莪朮 青皮 陳皮 各五分

益智 一分 右生姜を加へて水煎す

歸脾湯乃方　白朮　茯神　黄芪　龍眼肉
各一　人參　木香　各五分　酸棗仁二分　甘草
三分　右生姜大棗を加へて水煎を柴胡と
梔子を加へて加味歸脾湯といふ
敗毒散乃方　柴胡　桔梗　羌活　獨活
茯苓　川芎　前胡　枳殼　人參　各多分
甘草少　薄荷少許　生姜を加へて水煎を
八物湯の方　四物湯と四君子湯とを合して
八物湯と名付く
胞陽和血湯乃方　蔓荊子　二分　香白芷　三分

柴胡　黄芪　炙甘草　當歸　防風　各五分
升麻　七分　水煎して服を
八味順氣散乃方　白朮　茯苓　青皮
白芷　陳皮　烏藥　人參　各少分　甘草少
右細合して水煎服を
十全大補湯の方　八物湯と黄芪肉桂を加へ
て十全大補湯と名付く
附子理中湯乃方　人參　二分　白朮　乾姜
各三分　甘草　五分　附子　八分
右水煎して服を

以上乃備方まづその大槩をあらはす老人
会せく用へきなり
むかし扁鵲行て婦人小児
養老乃醫となりその治を施し治ひき
ゆゑに〳〵ぬべくいあり〳〵孫ど往
業婦人壽仲小児育草を撰ことせ
ちこなり是業乃まゑ老人養草を撰
書林何某乞てホにのゞきく世乃りて
あらそび草とす 本邦乃ひろへ和訳三
部ばかあり今此三書を合をて養生

三部ばかといくんもまゝ宜なゝどや

正徳六年丙申 春分日

牛山翁 春月啓益述

老人必用養草卷五終

正德六丙申歲二月吉日

花洛書舗　八幡町通同之町角
粕淵權兵衛